

舟戸夜雨

いさり
漁する舟戸の浪のよるの雨

ぬれてや網の縄手くるしき

舟戸は昔、上総から常陸へ通ずる道の渡船場であった。
また印旛沼で魚や貝を捕る漁師たちの船溜の場所にも
なっていた。この辺りは漁師の家が点在するひなびた小
さな漁村であった。その昔、舟戸の風景は晴れた日中も
よいが、雨の降る夜もまた格別の風情があったといわ
れる。

——しとしとと小雨の降る舟戸の夜はもの寂しく、暗い
岸辺の漁師の家からは青白い灯がぼんやりと光って見
える。時折宵間の湖面から水浴びする鴨の声がさわが
しく聞こえてくる。この雨のなか、漁師の翁が小舟に
乗って漁をしている。網が雨に濡れ、浪に寄せられて、
網をひく縄手が辛そうにみえる——と前掲の歌は、雨
の夜景を詠んだものである。

選文 立原 三知男